

高専学生への支援活動について (進路支援室，専攻科業務からの考察)

野頭 克己*

On the Support System for the Students at Tokuyama College of Technology

Katsumi NOTO*

Abstract

I came to this school in December in 2004 from the Saikyo Bank, and have been working for the advanced course students. I belong to the student affairs division. Also, I am a staff member at the Career Support Center. I have been giving the students support for their future career. This paper aims to a) describe the current situation of colleges of technology in Japan, b) show the results of the questionnaire to the students, c) talk about the problems with the support system for the students, and d) suggest a few ways to solve the problems.

Key Words: student affairs division, career support center, do it yourself

1. 現状

高専は高等教育機関の中でどのように位置付けられているのだろうか。

まず本校は国立であるということを考えてみよう。国立である必要性は何だろうか。国立ゆえに国の教育方針がダイレクトに伝わる。特に本校は多くの校長が、文部科学省より派遣されている。さらに事務職の部長、課長は数年おきに他の国立教育機関より派遣されている。結果、国として変化を望まないものは変化させず、逆に方向変換時には遅滞なく方向変換しなくてはならない。

さて高専の設立当初は、高専の大きな目的は即戦力の技術者養成であったと聞く。その後、技術者養成というのは時代の変遷に敏感に影響し学校の体制も変化してきたが、今も昔も我が国にとって技術者の養成は必要な教育であることは間違いなく、高専の基本理念は引き続き技術者の養成である。

国立であることの大きな特色は授業料が安く設定さ

れていることであろう。多くの学生（の家族）はこの魅力が一番で高専進学を決定している。授業料は本校の学生の質が高い理由の一つである。

国立であるがゆえに教職員の質の確保も果たせる。教職員にとって給与面はともかく安定した地位が確保されている。しかし反面、勤労意欲については他の公務員と同じく、問題が多いことも確かである。私が民間からの人事交流で高専に出向したのもこれに刺激を与えるためであろう（筆者は平成16年12月に採用された）。

高専の魅力に、卒業後の進路面もあげられる。就職先、進学先が高水準であることがより学生を集める要因となっている。これは学生の質の高さと一定の教育水準の確保が外部から認められている証拠である。

さて、民間と公務員の差を改めて感じたのは所属する進路支援室の事業の一環として、金沢工業大学へ訪問した時である。一番感じたことは職員の意欲の高さがこの大学を支えているということだ。この大学は出口である就職においては抜群の成果を出し、一方入口

* 学生課

である入学時に、高校時代の成績にこだわることなく、学生の出身地域も全国に渡り、4年間の一環教育で学生の質のレベルアップを図っている。その背景が職員の能力、あるいは組織力であると感じた。これに対して本校は残念ながら、職員の平均的なレベルはまだまだの感がしている。教員においてもレベルに極端な差があると感じている。

さて、高専の特徴として5年間の一環教育であるという制度の面がある。即戦力の技術者養成という要請に応えるため、4、5年生は専門技術の勉強に追まわられている。技術を高めるための実習、実験に多くの時間を割き、また卒業研究に四苦八苦してようやく卒業ができる。高専生は高校から大学4年生までの授業を高専5年間で詰め込まれるというのが、私の感想である。

このような中、高専の初期の目的は達成されたとして、より高度の技術者養成と学士を取得させるため専攻科が本校でも平成7年に設立された。設置の背景には本科5年の卒業時に就職でなく、編入学という進学希望者が増加したこともあろう。また、高専卒は短大卒という資格であり、就職時、あるいはその後の社内での地位のアップを図りたいという要請（大学卒の取得）もあるであろう。さらに平成15年にはJABEEの資格を取得し、専攻科は高専でもその位置づけが重要視されている。

一方、編入学先からの評価や就職先からの評価も高く、高専への期待度は高い。

高専のカリキュラムは密度が高く、他の大学に編入学した卒業生は大学3、4年で、再度高専の勉強をするという感じがするという話を聞く。また大学院に進学した専攻科卒業生は、専攻科時代に既に大学院生なみに、学会発表も行っており、この結果、大学院に進学した専攻科生は特にとまどいが無いと聞いている。我々からみると卒業後の他大学への編入学は当然ながらそのカリキュラムに一貫性がなく、不足より重複する部分が多いと感じている。この点、専攻科への進学のほうがスムーズな教育支援を受けることになるだろう。従って大学院から他校へ進むほうが、専攻科時代に研究面でサポートする先生がいるという条件はつくが、学生には適していると感じる。ただ、7年間同一の場所で学習することは刺激が少なく、マンネリ感を感じるであろう。

2. 学生へのアンケート

それでは学生の現状を過去行った進路支援室アンケートを見ながら分析してみよう。

①調査1（平成18年3月実施。全学年対象に1年間

の進路支援室活動の反響を調査するため実施。）

・項目（勉強・生活・夢・将来） キーワード「学業への不安」

学生に言葉は悪いが詰め込み教育をしていることから、学業面での不安は高い。

1年生の時点で大きく立ちほだかる問題が、学業に対するものである。一つは中学生時代トップクラスの成績であった学生がクラスないし学年内で低位のランクに必ずなるという事実。もうひとつは理工系の壁。学業に対する悩みは成績如何に関わらず5年生まで続く。4年生、5年生のアンケートはコメントも記入させたが、不安がないという理由に（最終試験をクリアして）卒業できて良かったというものがいくつかあった。就職が決まったという事実より、学校をようやく卒業できたという感想の方が強い学生が結構存在するのである。

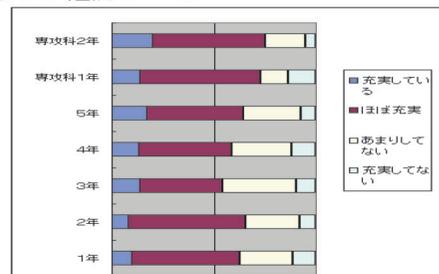
(1) 勉強について（グラフ1）

充実している、ほぼ充実している合計が1年生63%、2年生65%、3年生54%、4年生59%、5年生65%、専攻科1年生73%、2年生75%である。3年生がひとつのターニングポイントで、その後学年を追って徐々に増加していく傾向にある。2年間の混合学級を終了して、専門に分かれる3年生が学業上の難易度でも分岐点となっている。例えば情報電子工学科へ入学した学生は何となく進路を決定している学生も多く、プログラミングといった専門授業で多くの学生が壁にぶち当たる。

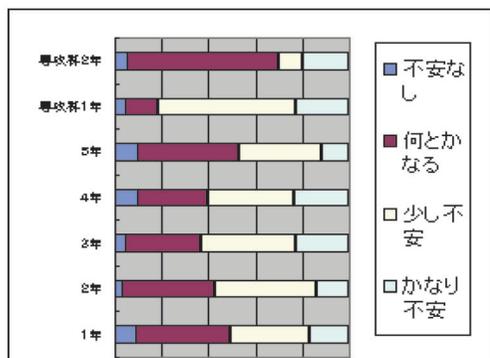
(2) 将来について（グラフ2～4）

不安無し、何とかなる、という楽観論は1年生で50%、2年生で43%、3年生で37%、4年生で40%、5年生で53%、専攻科1年生で19%、2年生で70%という結果である。専攻科1年生は夢・目標と連動して今後進学するのか、就職するのかという目前の設計を悩んでいる学生が数にして20人前後いるようである。一方、本科の4年生、5年生は将来設計について、夢・目標はあるが、不安であるという学生と、夢・目標を持っていないということから将来に不安を持つ学生が入り交じり、半数近い学生が不安をもっているようである。

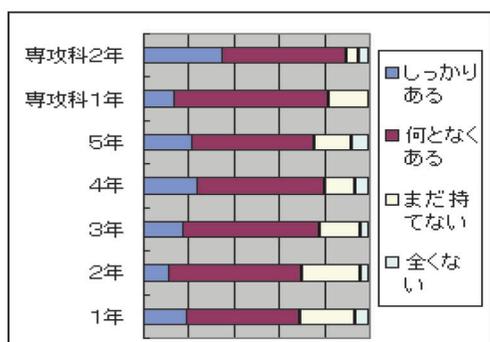
グラフ1 勉強について



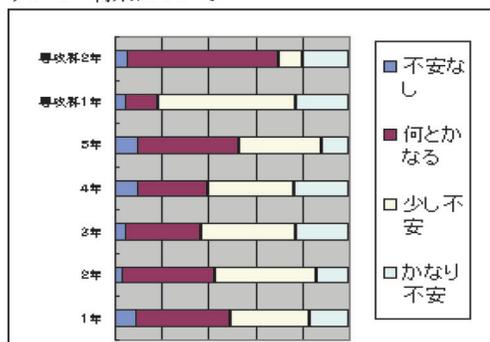
グラフ2 生活について



グラフ3 夢・目標



グラフ4 将来について

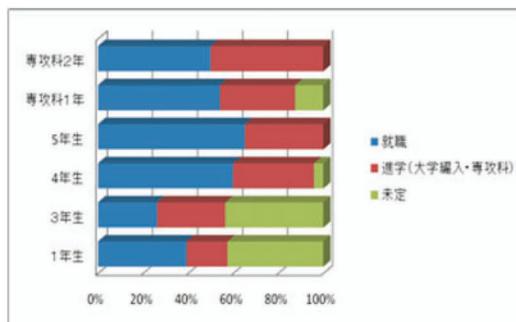


② 調査2（平成18年3月～平成19年6月 実施）

- ・ 進路決定の時期（グラフ5）

進路未決定学生は3年生まで40%以上にのぼる。問題なのは進学希望者がどこまで将来を見据えて決定しているかということである。将来の職業の選択を先延ばしして進学する学生も多いといえる。近年技術系の大学院進学率は高く，大学院への道も開けてきた。しかし，先延ばしの結果が大学院となると，問題は大きい。

グラフ5（進路について）



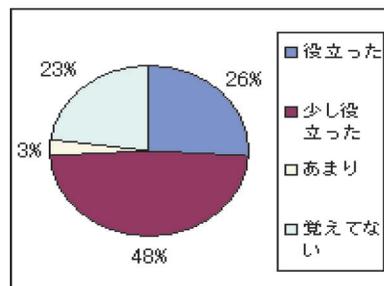
③ 調査3（平成18年3月実施）

- ・ 講話の受講（グラフ6，7）

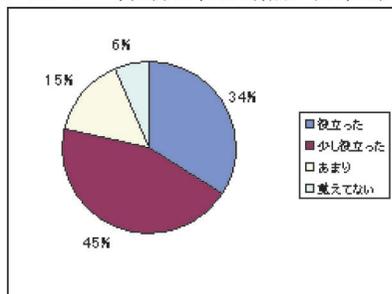
進路支援室の活動で反応が良いものが先輩の講話である。

特に不安である学業面のこと，進路選択での迷いを同じ経験をしている先輩が話すことで安心するようである。迷っているのは自分だけではなく，またその後進級，卒業，就職を無難にこなしている姿を見て安心するようである。

グラフ6 5年生の講話（1年生）



グラフ7 専攻科2年生の講話（2年生）



④ 調査4（平成19年1月；対象3年生）

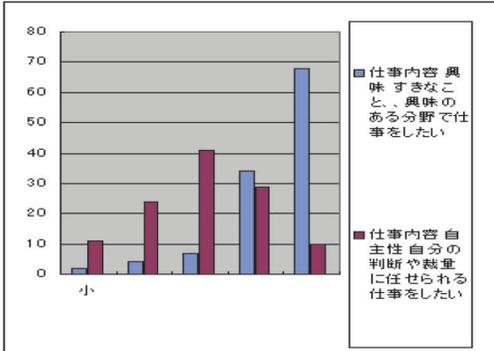
- ・ 職業の選択で重んじること

こだわり度の高いか低いかを5段階で選択した調査である。

(1) 仕事内容 (グラフ8)

- ① 興味 最優先の5の選択が多い。
- ② 自主性,裁量について 余り興味を示さない。
(3の回答を中心としたピラミッド型)

グラフ8

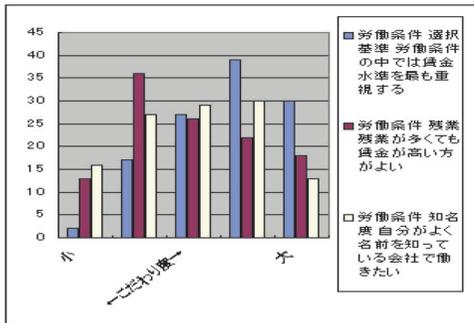


(2) 労働条件等 (グラフ9)

賃金は一定水準が欲しいが、残業は少ない方がよい。知名度はそれほど気にはしていない。

- ③ 賃金水準 4が最高(どちらかというとな賃金は重視)
- ④ 残業 2が最高(残業は少ない方がよい)
- ⑤ 知名度 3, 4, 5とバラツキ, ならぬかなピラミッド

グラフ9

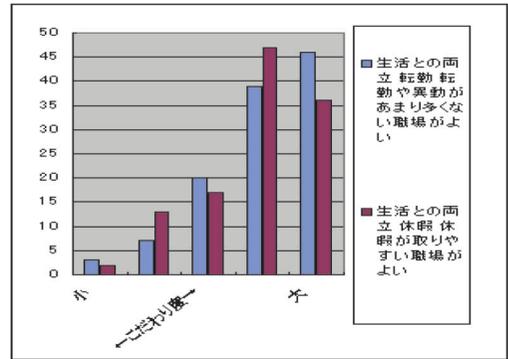


(3) 生活との関連 (グラフ10)

転勤は少なく、休暇は取りやすい方がベター。

- ⑥ 転勤が少ない方がよい 優先度5
- ⑦ 休暇 取りやすい方がよい 優先度4

グラフ10



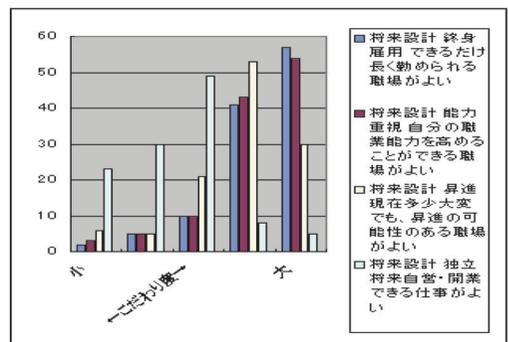
(4) 将来設計 (グラフ11)

転職は考えてなく、但し能力優先、昇進は出来ればしたく、独立には消極的。

- ⑧ 終身雇用 優先度5 (安定志向)
- ⑨ 自分の能力を高める職場 優先度5 (能力重視、現実的, (高専の立場を理解?))
- ⑩ 昇進の可能性 優先度4 (できればといった感覚か)
- ⑪ 独立 1, 2, 3が多い (拒否反応)

本調査は優先度を5段階とした調査であるが、例えば賃金は高い方がよいのか、あるいは休暇は取りやすい方がよいのかとの質問に対して、やや自重した優先度4の回答が多く、紳士的な回答であると思える。

グラフ11



3. 現状での課題と結論

① 学生の自覚

本校では生徒指導はこまめにされているのが現状である。メリットも多い反面、学生の自主性が育たないというデメリットもでてくる。教員が学生の面倒を見すぎるといった傾向がある。しかし今後の大学改革の流れにそって、学校の統合、又、人件費等の削減の影響が当校にもでてくる。教員が学生ひとり

にかける時間は徐々に削減されていくと推測される。効率的な指導と自主性の培養が課題である，が良いチャンスでもある。

筆者が具体的に就職の面接練習を3年間実施してきたの感想は以下のとおりである。クラブ活動経験者はその活動を通して人間性の成長があるはずだが，おとなしい子が多く，特に表現力が弱い。文武両道といった面をもう少し強調すればと感じるのだが，その自覚が少ない。特に学力面について，就職先，進学先とも高い評価を得ていることや，前に述べたように学習時間が厳しい環境下でクラブ活動を5年間続けるのは，企業サイドからみれば評点の高い項目である。しかしながら学生にその自覚がないし，主張（自己PR）にうまく活かせていない。自分の長所，短所を自覚させることが私の当面の指導目標である。

現状，進路支援室として共通の課題は，一つは自主性を育てること，もう一つはもっと上を目指す姿勢をださせることだ。欲をださせること，また，諸先輩の待遇面での不満を考慮し，入社時から待遇面で差がつかないように，またより自分を活かせる企業を探す手助けをしてやりたい。

② 「犬と男は放し飼いがよい」（G+テレビ；著者来訪；嵐山光三郎と小沢昭一との対談から）。

犬を放し飼いにするのと他人にどんな迷惑をかけるか心配である。今の学生は鎖をはずしても飼い主の傍から離れない気がする。アンケート結果からも，自主性に欠け，しかしながらまじめな学生像が浮かび上がる。

教員も鎖をはずす勇気が必要ではなかろうか。例えばアンケートで将来独立したい学生はほとんどいないというのは本校のみの特徴ではなかろうが，教員にも保守的な体質が染み付いている結果の反応とも感じる。これは日本の社会が減点主義であることも大きな理由であり，本校のみの問題ではないのは確かである。さらに教員が自分の指示に従わない個性の強い学生を敬遠する傾向が強いためでもあろう。

スポーツの世界では，特に野球の日米比較，あるいはサッカーの日本人選手と海外選手の差を目にすると，個性を伸ばさない日本の教育現場がそのまま反映されているようにも見える。自主性と学生の個性は問題が違うかもしれないが，高水準の本校の学生だからこそ，後は教職員の力次第で自主性が伸ばせると感じる。

フランスの諺 “こどもをだめにするのは簡単だ。欲しがるものをすべて与えることだ”

先生，手を差し伸べるのをぐーっとがまんして，押えてみませんか。自分で決めさせましょう。

(2007.9.5 受理)